

建礼門院右京大夫の姿勢

小 原 幹 雄

(文学研究室)

標題の「姿勢」とは、右京大夫が、『建礼門院右京大夫集』執筆編纂の「姿勢」という意味で、この「集」を通して、彼女の執筆姿勢態度を考えてみようというのが、本稿の目ざすところである。

(一)

家の集などいひて、うたよむ人こそかきとむることなれ、これは、ゆめくさにはあらず。たゞ、あはれにも、かなしくも、なにとなくわすれがたくおぼゆることどもの、あるをりく、ふと心におぼえしをおもひいでる、まゝに、我めひとつにみんとてかきおくなり。

われならでたれかあはれとみづぐきのあともし末の世に傳はらば

『建礼門院右京大夫集』の冒頭の一節、すなわち序文に当たる所である。右の

家の集などいひて、うたよむ人こそかきとむることなれ、これはゆめくさにはあらず。(中略)わが目ひとつにみんとてかきおくなり。

というのは、右京大夫が、この「集」を執筆するに当たつての姿勢を宣言している文章である。歌人は家集を編む、それは、自分の歌を「かきとむる」のである。「かきとむる」とは、この場合、後世をも見通して、人の目に触れることを考えて、また、見てもらいたいために、詠歌を集め編纂しておく、ということである。だが自分はそうではない、「我めひとつにみんとてかきおくなり」と右京大夫は言う。現在も将来も、ただ自分一人の思ひ出を温め、自分だけで見ると、書き留めておくのであると言う。こう言つて、この「集」執筆の根本姿勢をまず明らかにしている。

この姿勢は、巻末にも繰り返されている。その部分を跋文に当たると言つておく。いたづらにあかしくらすほどに、思いでらる、事どもを、すこしづつかきつけたるなり、をのづから人の、さる事やといふには、いたく思ま、のことかはゆくもおぼえて、せうくをぞ、かきてみせし。これはたゞ、我めひとつにみむとて、かきつ

けたるを、のちにみて、
くだきけるおもひの程の悲しきにかきあつめてぞさらに知らる、

右に見るように、「これはたゞ、我めひとつにみむとて、かきつけたる」と、ここでも繰り返して言っている。

この姿勢を述べている所の、「うたよむ人こそかきとむることなれ」というのは、「だが自分は歌人ではないが」という意を含んでいと取られるのは当然である。この言葉は、この表現通りに、素直に、彼女の真意と取つて然るべきであると私は思っている。すなわち、自分は、専門歌人ではない、がしかし、歌人が、「かきとむる」ところの家の集を、「かきとむる」のであると断っているのである。

事実、この「集」に残したように、多くの歌を作っているが、彼女と交りのあつた小侍・隆信・定家等が、歌人として、各歌会に出席し、各撰集に顔を出しているのに、また彼女は俊成の養女分でありながら、右京大夫には歌会や撰集に關係した事実はなく、したがつて、「自分は歌人ではない」という意識は、正直なところ、彼女の本当の言い分であり、謙遜と解さなくてもよいかも知れない。だが、そのような彼女が、そう断つても、この「集」を書かねばならないのは、書かずにはおられないものが、彼女の心を激しく揺り動かしたからである。

(二)

この「集」は、他人に見せるためのものではない、「我めひとつにみんとてかきおくなり」ということは、以上考えてきたところであるが、こういう書き出しや終り方は、謙遜的なまた右京大夫の独自の姿勢を打ち出していると思われもし、そしてそれは間違つた見方ではないと思うが、ただそれだけではなく、日記・随筆・家集等の持つ伝統的な姿勢に、右京大夫も拠つているものと考えられるものである。

例えば、『土佐日記』(日本古典文学大系)の終りには、

わすれがたく、くちをしきことおほかれど、えつくさず。とまれかうまれ、とくやりてん。

とあり、また『枕草子』(同前)の終りの段(三一九)にも、

この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見んとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなう、人のためにびんなきいひすぐしもしつべき所あれば、よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

とあつて、人に見せるものではないから、早く破り棄てたいとか、まさか人など見るものかと思つて、書き、よく隠しておいたと思つたのに意外に外部に漏れ出た、とかいう姿勢を語っている。

右京大夫が、この『集』を執筆するに当たって、こうした『土佐日記』や『枕草子』の姿勢に従ったものと考えられると思う。

歌人ではないが、家集を書き留めるという姿勢に、『土佐日記』や『枕草子』等の執筆姿勢に、ならっている姿勢が見られるのである。

(三)

すでに前に述べたように、右京大夫は、「我めひとつにみんとてかきおくなり」と言い、跋文でも、それを繰り返しているが、そう言いながら、序文でその言葉の後に

われならでたれかあはれとみづぐきのもとし末の世に傳はらば

という歌を書いている。これは、明らかに他人の目を予想している心の歌であって、この歌の前文とは矛盾することになる。だが、これは物を書く者に共通な意識である。公然と積極的に人に見せるために書くのではないと思っても、あるいは、この書き物が他人の目に触れるかも知れないという意識は普通のことである。だから矛盾として、その執筆姿勢を不徹底とか不合理とかと言って、責めるべきではない。自分だけの思い出として大切にしておくだけならば、もともと文字に表現することはいらぬことであるとも言われるであろう。

この『集』の中に、他人の目を意識している点は指摘できる。定家に撰集の資料としてこの『集』を提出したことは多くを言うに及ぶまい。跋文に、「をのづから人の、さる事やといふには」、「せうくをぞかきてみせし」と、彼女が自ら進んで書いて見せたのではないが、この『集』が完成するまでに、すでに人に見せているのである。また前半において、高倉院の笛の音の秀れている事に関する記事には、音楽の血を引いている誇りと言ったものを書き留めておきたい意識が感じられ、また後半、俊成の九十賀に後鳥羽院から賜わる法服に歌を刺繍したこと、またその歌の賀歌としての適不適を言い、やはり自分の思った通りに適当な歌でなくて急遽、その和歌の詞が訂正された記事を書き留めている所、いずれも、他人の目を意識しての上のことと思われるのである。自分は歌人ではないと言いつつも、歌に対する一見識を持っていることを示している。さきの笛の事の際と同じ姿勢が見られる。

また、この『集』の中心であり、彼女をして執筆に駆り立てている主な動機である資盛の思い出について、記す所は、資盛という実名をあげて、その交渉を記している所はなく、贈答歌において、隆信と資盛とのいづれとの贈答歌であるのか、読者をして混同させる記し方、それは臆化の手法であるが、そうした方法を取っている点等は、それは、自分だけが思い出として、書き読むものであるとは言いがた、やはり他人の目を意識しているか

らであると考えられる。

資盛について言う場合には、

あきゆふ、女どちのやうにまじりてみかはす人もあまたありし中に、とりわきてとかくいひしを

とかく物おもはせし人の、殿上人なりしころ、ち、おとこの御ともに住吉にまうでて、かへりて

人の心のおもふやうもなかりしかば

ち、おとこの御ともに、くまのへまいるとき、しを、かへりてもしばしをとなければ

わがもの申す人

たれぞとふめれば、その人としもたしかなる名をいふに

はかなくなりし人

なみに入にし人

はかなかりし人の水の泡となりける日

さめやらぬ夢とおもふ人

水の泡と消えにし人

その他、このような言い表わし方をもって、記している。隆信についても、

そのかみ、おもひがけぬところにて、よ人よりもいるこのむときく人

と表現して、次に贈答歌を載せているが、その贈答歌が『隆信集』に見出されるために、

右の「人」が隆信と知られるのであるが、

車をこせつ、人のもとへゆきなどせしに

の「人」は、甚だ不鮮明である。

ところで、資盛・隆信以外には、実名をあげている。頭中将さねむね、権亮維盛、隆房（これより）、重衡、公衡（きんひら）の中将、清経（なりちか）の中将、宮の權大夫時忠、成親（なりなり）の大納言、忠度の朝臣、經正（つねまさ）の朝臣、兼光の中納言、みちもりの朝臣、雅頼（まさより）の中納言、親宗（ちかむね）の中納言、五條三位入道、民部卿定家、等その他、また実名は示さなくても、高倉院、建春門院、中宮、大炊の御門（おほく）の齋院、小待従、小宰相どの、とかその他と言って、その人と分かる表現を取っている。ところが、資盛また隆信については、右のような臆化の手法によっているのである。

もっとも、資盛という実名は、二度は見える。それは、近衛殿（藤原基通）が、二位中将であつた時、花見に引き具した殿上人たちの名を示した中に、資盛の名も記され、その花見の土産として、中宮方へ桜の枝が贈られて来たのに対して、右京大夫が歌を返し、その歌の返しに、隆房少将と資盛の少将が歌を詠んだとして、隆房と資盛との名とその返歌

とが載せられている。その資盛の歌は、

もろともにたづねてをみよ一枝の花にこゝろのげにもうつらば

というので、右京大夫の歌に対する返歌として、資盛が、特別な感情をもって、彼女に誘いをかけたような内容にも受取ることとできるが、これは宮廷における社交辞令的な、普通に遣り取りせられる程度の内容のものであって、この時点では、まだ二人の間には、特別な関係は生まれていなかったと見られる。資盛の名が記されているのは、この二回だけである。しかも、それは、資盛だけの名を記したのではなく、他の殿上人の名と一緒に記してある。

これは、資盛との愛情の交渉が出来る前の時点と思われる記事の所であって、資盛との特別の関係、「契^{ちぎり}とかやはのがれがたくて、おもひのほかに物おもはしきことそひて」という関係が出来てから後は、実名の資盛は書かれなくなっているのである。資盛という実名をあげるかどうかという境目に対する右京大夫の姿勢は、割にはつきりしているようである。

隆信の名は、何処にも出て来ないで、『隆信集』によって、右京大夫との特別の関係があったことが知られるが、二人の間には、資盛の場合のように、隆信という実名を書くべき関係が、それまでになかったからであろう。

そして、この二人との関係が、混同されるような書き方をしているのである。

右京大夫にとって、大きい比重を持っている事柄について、即ち資盛の思い出にのみ生きて行つたとさえ言われる事柄について、資盛の実名を出さないということ、それはすでに度々引いたように、「我めひとつにみんとてかきおく」のであって、他人に見てもらうためではないから、相手が誰であろうと、知ってもらう必要はないのだ、と言えばそれまでだが、前言した如く、臚化の筆であり、やはり他人の目を意識しているわけである。

その臚化というのは、他人の目を意識していることと同時に、文学創作的な手法である。臚化法とか婉曲法というのは、すでに先行の作品に見られる文学創作上の手法であって、右京大夫は、この方法の意識を大きく持って、このような書き方をしたことを併せ考えられる。

しかし、恋愛の事に関しては、筆を臚化させていくという所には、なにとなく、みきくことに心うちやりてすぐしつ、なべての人のやうにはあらじとおもひしを、

また、群書類従本では、この次の所に、

見かはす人もあまたありしなかに、とりわきとかくいひしを、あるまじのことやと、人

のことを見聞きても思ひしかども、

また

よのつねのありさまは、すべてあらじとのみおもひしかば、
という恋愛についての最初からの心の姿勢が、働いているのであろうか。

(四)

彼女は、何を書こうとしたのか。それは冒頭の文中にあるように、自分の過ぎて来た方を振返って、

たゞ、あはれにも、かなしくも、なにとなくわすれがたくおぼゆることどもの、あるを
りく、ふと心におぼえしをおもひいでる、まゝに、

書くのである。それは、わが生涯の最も忘れがたく、感動深い事柄を書くというのであって、資盛の思い出だけを書くのではない。「資盛に対する思慕によって、覆われているかの如く見ることは」「誤り」であると言われる⁽¹⁾。それは尤なこと、彼女は決して資盛の事だけを書くとは言っていないし、事実、本『集』の内容は、資盛の事だけではないことは、説明を要しない。前半は、平家全盛時代の懐古的な思い出が、主軸をなしていることは肯定されるであろう。老年になった彼女の心の中に、かつての平家全盛の時代への思慕・懐古の情が、大きく強くそして深く流れていたことには間違はない。かつての佳き日への懐古的追慕の情が高く奏でられる思い出の曲と言ってもよい。「高倉^{たかくら}の院御位のころ、承安四年などいひしとにや」と書き出すこの筆勢にも、それが強く感じられるのである。

しかし、資盛に対する思い出、思慕が、強く高く、そしてうねうねと全体に流れて、本『集』の主調を支えていることは否めない。資盛に関して費された紙数は、平家全盛への懐古のそれよりも多い。

前半の中宮を周る人々の描写等、平家全盛時への懐古的描写は、むしろ後半の悲劇、それは資盛への思慕の情をかきたてる前奏曲の役目をしているかの如く見られる(本集の構想上の特色である対応という構想の一つとして考えられる)。あのような平家一族の中における資盛という印象が強く感じられる。

また、巻末に、「老^{おい}のち、民部卿定家の歌をあつむることありて」、定家が、右京大夫に「かきおきたる物や」と尋ねられ、「人かすにおもひでていはれたるなさけ、ありがたうおぼえ、さらに定家から、歌に付ける作者名は、「いづれの名をとかおもふ」と問われた「おもひやりの、いみじうおぼえて」、

なをたゞ、へだてはてにしむかしのことのわすれがたければ、「その世のまゝに」
など申とて、

言の葉のもし世にちらば忍ばしき昔の名こそとめまほしけれ

と答えて、その結果、『新勅撰集』で、彼女の作者名は、「建礼門院右京太夫」と、定家はしたのである。「その世のまゝに」というのは、建礼門院に奉仕していた時代の女房名のまゝに、ということであって、特別に資盛との関係のあった時代の女房名ということではなからうが、定家から、建礼門院奉仕の時代の女房名にするか、後鳥羽院奉仕の時代のそれにするかと問われて、その「おもひやり」に大変感激しているのは、問う定家の方にも無論問われる右京太夫の方にも、資盛にまつわる思い出を胸に置いてのことであつたと推察しても誤りではなからう。資盛の存在しない時代への懐古など、右京太夫にとつては、意味は無かつたろう。

勿論私は、右京太夫が、資盛の事のみを書き留めようとしたのだと言おうとしているのではない。しかし、本『集』執筆の動機や姿勢に資盛という大きな影が、動いていたこと、彼女の姿勢が、より大きく資盛へ向つていたことは認められねばなるまい。

この『集』の調子が抒情性に富んでいるということも、懐古の情が、そうさせているのである。「ただ、あはれにも、かなしくも、なにとなくわすれがたくおぼゆることどもの、あるをりく、ふと心におぼえし」事を、「おもひいでるゝまゝに」書くという姿勢が、そうさせているのである。ここには、写実性とか記録性とかいうことは考えられない。抒情性とか物語性といったものがあるのである。

比較される『健寿御前日記』の姿勢との違いも、根本はこのことによると思う。「右京大夫集」の火事の場合、「いづれのとしやらむ、五せちのほど内裏ちかき火の事ありて」の文章と、『健寿御前日記』の火事の描写、「院の御方に、今日吉にこもらせ給ひたるほど、一ところおはしますに、七條殿の寝殿のたつみにあたりたる萱の御所に、火いでにけり」(朝日古典全集)の両者が比較され、前者(『右京大夫集』)は、「種の曖昧性」があり、「迫真性には乏しく」、「具体的描写は見られない」、「概括的・概念的な説明があるだけである」、「しかし、かえって、そのために、全文の調和による一種の普遍性・物語性を」得ているとされ、後者が、「精細な描写は、事件の当面性を強調し」、「日記性・報告性を示すともいえる」と評される如きである。

『右京大夫集』では、火事場の描写において、資盛の父重盛について、小松のおとゝ、大将にて、なをしに矢おひて、中宮の御方へまいり給へりしことがらなど、いみじうおぼえき。

と具体的に多くの筆を費しているのも、資盛との関連の姿勢からである。「契とかやはのがれがたくて」、「とかく物おもはせし人」、「わすれがたくおぼゆる」が故に、その関

連において、父重盛の凛々しい、美しい姿が、思い出として強く残っているわけであり、そこには、資盛の面影が顔つていくかのようである。事件の記録というようなことは、彼女の心の中にはない。右京太夫は、日記、記録を書くとはしていないのである。ただ、一例をあげると、俊成九十賀の事に関しては、事実を事実として書き留めておくという、記録性や日記性を持つてはいるが、それもむしろ自分自身を中心とした書き方であつて、客観的公的な記録性とは異なるものであつて、概括的に言つてこの『集』が、物語性・抒情性に支えられていると言ひ得る。

それは、『健寿御前日記』とは異なる姿勢である。『健寿御前日記』は、もともと『右京大夫集』とは異なつて、人々からの求めに応じて、かつての建春門院女房時代の思い出を書き残そうという姿勢を取つてゐる。例えば、

いふかひなき、昔ものがたりを、つれづれなるまゝに、いひいづれば、かはたしをだに、その世を見ぬ人は、さすがに、きかまほしうするもありけり。(二)

うるさく人の聞かまほしくすれば、おぼえぬことどもの、四十年すぎにしを書きつくれど、わが身のほかはおぼえず。(四〇)

特に事ある毎に、女院を始め女房たちの服装を精細に記録的に語ろうとしており、かの女房名寄せの項も記録性の高いものである。言わば、公卿日記と同じ執筆態度姿勢を取つてゐるのであつて、これは全体的な姿勢であつて、単に火事の場合に代表されるような文章執筆の姿勢だけではない。この姿勢の違いは、『右京大夫集』には、他人の歌をも合せて、三五九首の和歌が編せられているのに、『健寿御前日記』には、二〇首しか載せられていないという違いにもなつてゐるのである。『健寿御前日記』の写実性・記録性というものは、あたかも虚構の物語ではなく、世の人に実の話を伝えようとしたという「かげろふ日記」の著者の姿勢を思わせる所がある。

右京大夫と健寿御前との執筆姿勢は、根本的に異なつてゐるのであつて、したがつて、そこに書かれる事柄も、その文体の調子も、おのずから両者の相違が出て来てゐるのである。

(五)

『右京大夫集』の構成について、三部論がある。前半の「なにとなくよみし歌」四〇首の歌群と、後半の「七夕の歌」五〇首とによつて、全体が、三部に分けられるという論であつて、そこに本『集』における右京大夫の構図が見られるというのである。今、この論の適否を論じようとは思われないが、本『集』の構成に当たつて、すでに指摘されている所であるが、対応の意識があつたことは認められねばならない。

まず、序文に始まって、

雲のうへにかゝる月日のひかりみる身のちぎりさへ嬉しとぞ思ふ^{うれ}

と、承安四年正月一日の高倉院・建礼門院の二方の「めもあやにみえさせたまひし」に筆を起し、数々の思い出を記して来て、治承五年正月十四日、高倉院崩御の事にまで及び、かげならべ照る日の光かくれつ、ひとりや月のかきくらすらむ

と悼歌を詠んでいて、起筆の時と同じく、高倉院・建礼門院を日・月に譬えている。この対応の構成は、どうしても、ここまですべて、一まとまりがついてあると見なければならぬ。そして、この歌の次に、

寿永元暦などのころの世のさはきは、夢ともまぼろしとも、あはれとも、なにととも、すべていふべきはにもなかりしかば、

と改まって、全く異なった調子で書き起している。そして、これから後、それまでとは相違して、平家の都落、人々の戦死、平家の没落の事に及ぶのである。さきの対応ということ、この文体の改まった調子、内容の歴史的な展開とともに、高倉院崩御の所で、一応の結びがついてあると見るのが、自然であり、そして当然である。「上巻・下巻」という言い方が妥当でないとしても、とにかく、ここで一旦結ばれていることは認めねばならない。勿論これは、この『集』を大きく分けて考える場合のことで、その間に、いくつかの段落を考えねばならぬことはある。

つぎに、すでに引用したように序文に当たる一文と、跋文に当たる一文とが、対応している。この事に関して、序文に当たる冒頭の文は、本集成立後に付け加えられた、という考え方が見られる⁽²⁾。しかし、それでは、いろいろと書きつづけて来て、跋文に至り、思いでらるゝ事どもを、(中略)これはたゞ、我めひとつにみむとてかきつけたるを」と記しておいて、前へ反って、

わすれがたくおぼゆることどものあるをりく、ふと心におぼえしをおもいでらるゝまゝに、我めひとつにみんとてかきおくなり。

と書くことになり、それは、前後を意識的に対応させる意図であったと言え、それでも理解できないこともないが、執筆姿勢の流れとしては、それでは、不自然なように思われる。

まず序文において、その執筆の根本姿勢態度を示し、ついで本文を書きついで来て、全体を結ぶに当たって、冒頭を振返って、執筆姿勢を再確認したというのが、最も自然な姿勢態度ではなからうか。その間には、思い出を書いていることが、人々に自然と知られることもあり、所望もせられたので、少々ではあるが、見せてもいるのである。序文に「我

めひとつにみんとてかきおくなり」と宣言した手前もあるので、人々に見せたということにも触れて、改まって跋文を書き付けたと見るべきである。跋文に

かへすくうきよりほかの思いでなき身ながら、年はつもりて、いたづらにあかしくらすほどに、思いでらるゝ事どもを、すこしづつかきつけたるなり。をのづから人の、さる事やといふには、いたく思まゝのことかはゆくもおぼえて、せうくをぞ、かきてみせし。これはたゞ、我めひとつにみむとて、かきつけたるを、

となるのが、自然であり、そうしたところに、右京大夫の姿勢を大きく見得ると思うのである。

こうした全体の構成に、意識的構成的な意図をもつて、書き継いで行つたことが見られる。

(六)

終りに、この『集』が、定家の求めに感激して、定家に届けられた時点に関して考えてみたい。前に引いておいたが、この『集』の巻末に、定家の元に出した事情が記されている。

老のち、民部卿定家の歌をあつむることありとて、「かきおきたる物や」とたづねられたるだにも、人かすにおもひいでていはれたるなき、ありがたくおぼゆるに、「いづれの名をとかおもふ」とはれたるおもひやりの、いみじうおぼえて、なをたゞ、へだててはてにむかしのことわすれがたければ、「その世のまゝに」

など申とて、

言の葉のもし世にちらば^{しの}思ば^{むかし}しき昔の名こそとめまほしけれ

かへし 民部卿

をなじくは心とめけるいにしへのその名をさらに世にのこさなん

とありしなんうれしくおぼえし。

と。これは、跋文の後に、記されている巻末の一文で、定家から撰集資料として求められた際に書かれたものであるから、それまでに跋文で終っていた「かきおきたる物」が、あったのである。右京大夫が生涯を振返って、「わすれがたくおぼゆることども」を書き留めて、跋文を記し、しばらく経って、定家の求めに応じる際に、この巻末の文章と歌とが記された。その間、どれだけの時日があつたかは、未詳である。そして考えてみれば、この巻末の文を付けて、定家にこの『集』が届けられたというのは、不自然であって、定家に届けられた『右京大夫集』には、この巻末の文は付いていなかったとみるべきであらう。彼女の手元に、大切に、思い出の記として、保管されている『右京大夫集』には、付いている

ものであろう。

定家に渡された『右京大夫集』が、序文から跋文に至る全部を含んだものであったのか、あるいは、その中から彼女が適宜に抜粋したものであったのか、勿論よく分からない。

また、この『集』を、何時、定家の元に差し出したのであろうか。それは、定家が、「歌をあつむること」があつた時であるが、それが、一般に言われているように『新勅撰集』撰集の際であろうか。なるほど、『新勅撰集』において、初めて、右京大夫の歌が採用されているから、『新勅撰集』撰集資料として使われたことに間違いはないが、定家の求めたのは、そして、彼女が、届けたのは、『新勅撰集』撰集の時点であつたろうか。

しかし、右京大夫は、「民部卿定家の歌をあつむることあり」と記している。『新勅撰集』撰集の事業の際は、定家は、「權中納言」であつて、「民部卿」ではなかった。『新勅撰集』撰集の際であつたならば、当然「權中納言」と書かれるべきであつて、その以前の「民部卿」として呼ばれる筈はないのである。無論、右京大夫の記憶違いなどと言つてしまえるものではない。とすると、この記述通り、右京大夫が、この『集』を届けたのは、定家の「民部卿」時代である。『公卿補任』によると、定家は、建保六年（一二一八）七月九日「遷民部卿」（五七歳）そして、嘉禄三年（一二二七、安貞元）十月二十一日「罷民部卿叙正二位」（六六歳）となつてゐる。定家の「民部卿」時代は、右の九年間余のこと、この間に、最も遅く見ても、嘉禄三年初冬には、『右京大夫集』は届けられていたということになる。しかし、この時点では、『新勅撰集』撰集の事は見えない。

しかし、『明月記』によると、寛喜二年（一二三〇）七月五日に、関白藤原道家から、定家は、勅撰集撰集に關しての質問を受け、翌六日に返答をしている。この事は、『新勅撰集』撰集の企画が、この頃、すでに考えられていたと言われているところである。ついで、七月八日には、「勅撰事、内々可申行御気色」とも見え、この七月から十月初めにかけてしばしば、道家やその子右大臣教実が、百首等を詠み、定家が請われて、それらについて撰歌している記事が見られるが、勅撰集撰集の準備と考えられる。そして十月初め以後、しばらく、これに關する記事は、『明月記』に見えなくなるが、そのうちに、貞永元年（一二三二）一月三十日定家は、「任權中納言」（公卿補任）となり、その年の六月十三日、参内して、勅撰集撰集の勅命を拝している（『明月記』）。

右の事から考えると、右京大夫に定家が、「かきおきたる物」を求めたのは、道家から勅撰集について相談を受け、道家父子の盛んな作歌に協力して、二人の歌に、「注進存旨等」したり、「取捨返上之」していた頃ではなからうか。もっとも、定家は、『明月記』に、自分は撰者になる望みは持っていないと言っているが（七月六日）、心中期する所あ

つて、道家父子に協力するだけでなく、その他にも撰集資料を求めていたのではなかったか。右京大夫もその中の一人であつたのであろう。

そうすると、寛喜二年七月以後、貞永元年一月三十日、「任權中納言」以前の間に、右京大夫は、定家の求めに応じたものらしい。

定家は、「民部卿」を罷め、まだ「權中納言」には任ぜられていなかった。即ち前の「民部卿」であつた。それで、右京大夫は、「前民部卿」と書くべきところをいきなり、「民部卿」と書いたのではなかつたろうか。

○

右京大夫の『右京大夫集』執筆の姿勢について考えてみたのであるが、彼女は自分は歌人ではない、また人に見せるものではない（そう言う所に先行作品の影響を見るが）と言いながら、書かねばならないものが、彼女を衝き上げていた。それは、建礼門院奉仕時代への懐古の情ではあるが、その中でも、資盛との愛情の思い出が、強く働いていた。しかしそれを記すには、他人の目を意識せずにはいられなかつた。

彼女は、正確な記録や日記を書き留めておく姿勢を取つたものではなかつた。したがつてこの『集』が、写実性や記録性には乏しいが、抒情的・物語的・懐古的な性格を持つてゐる所であり、そこには、「源氏物語」に造詣の深かつた父伊行の血を受けていることも考えられるであらう。

また、構成においては、対応の構成を用いている点に、全体的に、意識的構成的な姿勢を見得る。そして、『集』と呼ばれているが、文学的物語性が強く感じられるのも、特色の一つである。

そして、終りに、右京大夫が、求めに応じて、「かきおきたる物」を、定家の元に届けた時期について考えてみた。

（注）（一）入谷容子「建礼門院右京大夫集に關する一考察」、『国文』（お茶の水女子大学）、第三八号、昭和四十七年十二月二十日。

（二）福田百合子「建礼門院右京大夫集研究」、『日本文芸の世界』所収。昭和四十二年五月二十日発行。

（三）井狩正司「建礼門院右京大夫とその家集」、『国文学』（学燈社）、第十卷、第十二号。

『右京大夫集』の本文は、日本古典文学大系本による。

（昭和四十九年一月四日受理）